

The Rainbow : 自立した自我を求めて

The Rainbow: in quest of the independent ego

内藤 歓修

Kanshu NAITO

要 旨

自伝的小説 *Sons and Lovers* で自らの青春時代の苦悩を描ききった D. H. ロレンスは、以後、直面している生活上の問題をテーマにして、作品を書くようになる。*Sons and Lovers* 後に取りかかった *The Rainbow* は当時の作者の生活で解決が不可欠な重要問題である、「愛」というテーマを真正面から取り上げている。

心の底から愛し合える女性と出会うことができれば、その女性は恩師の妻であったという困難を乗り越え、結婚する。許されざる行動を正当化しようと、愛の勝利と賛歌を歌い上げるために書いた小説が本作品である。

これは親子3代に亘る、愛の姿を描いている。いずれの代も未知の世界に憧れ、それを手に入れようと努力している。最初の代の愛と結婚は、未だ自我が十分に目覚めきっていない、古き良き時代の牧歌的環境の中で描かれ、男女間で深刻な自我の闘争は生じていない。しかし、2代目の愛は壮絶な自我の闘争を引き起こす。互いに自我を主張し合い、譲ることが少ない。妻が子供を身籠もり、女性の根源的な力を誇示することによって、夫を服従させて行く。この2つの愛と結婚は一般にありがちな姿であり、さして珍しいものとは言えない。

しかし、3代目の愛の闘争になると様相は一変する。主人公 Ursula は理想の男女の愛を恋人 Skrebensky に求める。強烈な自我を持つ彼女は、従来に因習的な結婚を否定し、自立した自我の均衡の上に築かれた愛を求めて、彼と激しい闘争を繰り返す。どんな逆境にあっても妥協しない。最後には、心身共に傷付いた上に、求める愛を得られなかったが、再生した彼女が明日への希望を虹に見て、新たに前進して行くことが示される。

本稿では、3代の夫婦における理想の愛の探求の形を分析し、現実と理想の愛の落差に対する彼らの対応の姿を明らかにしたい。

The Rainbow において特徴的なのは、作者 D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) が従来と異なった、新しい手法を用いていると強調していることである。従来に小説に見られる伝統的な個性的、道徳的な人物を描くことではなく、個人の人間性の下に潜在する「非人間的意志」(the inhuman will) を追求しようとしている。1914年文学上の助言者エドワード・ガーネット (Edward Garnett) 宛の手紙¹⁾ で自分が関心あるのは、“what the woman is - inhumanly, physiologically, materially”

即ち “what she is as a phenomenon (or as representing some greater, inhuman will)” ということである。それ故、*The Rainbow* の初期の原稿 *The Wedding Ring* が気に入らなかったらしいガーネットに理解を求めするために、ロレンスは更に、You mustn't look in my novel for the old stable ego of the character. と述べ、Diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond - but I say, 'Diamond, what! This is carbon.' And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon. と主張している。

ロレンスの関心は当然、「炭素」、即ち人間の個性ではなく、本質を追究することにあつた。人間の無意識の領域に、根源的で揺るぐことのない存在、ダイヤモンドや石炭に対する炭素とでもいふべき存在がある。そのような人間の究極的な存在を探求することがこの小説の目的である、と述べている。では、本作品で主人公たちが求めた「究極的な存在」とは何かと、その探求結果を中心に、本作品を検討してみよう。

The Rainbow は Brangwen 家の親・子・孫3世代に亘る家族の生活を描いている。しかし、各世代の家族の歴史を綴るといった個人的な問題に終始することはない。個人レベルの生き方というだけでなく、より広く、人間の生きて行く姿、人間が真の意味で生きるとはどういうことかという非個人的な問題を提起し、追求している。Brangwen 家の人々を通して、この世で絶えず続けられる人間の生の営みと、次々と変化、変貌して行く社会で人間が避けることのできない意識の変遷を描こうという、雄大な構想を持ったものである。そこで問題にされる中心テーマは新しい形の「愛」の追求であり、ロレンスは強い自我を持つ男女がいかにしたらそれぞれの存在感を失うことなく結び付くことができるか、そのような「愛」の問題の解決を目指して物語を進めている。

本作品は19世紀半ば頃から20世紀初頭にかけての物語でイングランド中部地方のマーシュ農場主 Brangwen 家の Tom の時代から始まる。この家の各世代の男女における精神的変容を軸に愛と結婚の真の姿を検証する形で展開している。そこでは登場人物の内面が前景に押し出されており、あからさまに社会変動の場面が出て来ることが少ない。作者は巧妙且つ的確に、時代的变化と作中人物の心の動きとを関連させ、このような変化が彼らの生活に直接的、間接的にどのように影響を与えているか描いている。この時代は、イギリスが産業革命を成熟させ定着させた時期で、現代人が手に入れた自由と、その陰の部分である深い孤独感が個人の心の中に鋭く意識され始めた時期でもあった。産業発展のため、都市部から田園地帯に機械文明が侵入し、住民の意識に深刻な影響を及ぼした社会的変化が著しくなる。国家の基本産業であった農業から、商工業へとイギリスの経済が重心を移しつつあった。本作品において時間的流れはさほど重要ではないと見えても、時代の重大な社会的変動は登場人物たちの意識や行動に深く関連しながら、大きな影響を与え、その運命を変えて行く。

Brangwen 家の人々はマーシュ農場で、数世代に亘って自然の規則正しい循環とそのリズムに溶け込んで農夫の生活を営んでいた。彼らは天と地の交わりを知っており、大地の鼓動と肉体を感じながら暮らしていた。この家の男たちは豊かな自然との「血の交歓」(blood-intimacy, Chap. I) に充分満足して生きていた。しかし、女たちは絶えず別の世界に目を向けており、農場の遙か彼方にあるものに憧れ、未知なる世界を発見しようと望んでいた。それは現実生活を超えて、更に高い理想を求めるものであった。未知なるものを追い求める探求心がこの小説の主題になっている。血の交歓の中にしっかりと根を下ろし動こうとしない男たちと、秘密が解き明かされ、欲望が満たされる世界を求める女たちが対比され、全編に及ぶ男女の対立の構図を示している。男女の対立は安定と躍動、霊と肉、大地に深く根を下ろそうとする力と空高く飛翔しようという力という対立となって現れている。

この探求は Brangwen 家 3 代によって繰り返されることになるが、決して同じ行為の反復とはならず、世代ごとに、新規にやり直される。各世代での社会情勢の変化を背景に未知なる世界への探求が試みられている。20 世紀初頭前後にかけて古い社会体制が崩れ、機械文明の急激な進展と共に社会が著しく変化し複雑化して行った。この農場にも機械文明が目の前まで接近して来ていたのである。このような社会の仕組みの変動は、これから展開する物語の「時代的」性格に大きな陰を落としている。時代の変化によって起こった世代間の相違は第 1、第 2 の世代と第 3 の Ursula の世代との間において特に著しくなっている。

第 1 世代の主人公 Tom の母親も Brangwen 家の女性特有の考え方をしている傾向を持っていた。未知なものに憧れ、その秘密を解き明かすための鍵が知識にあると考えていた彼女は、6 人の子供の末っ子として、溺愛していた Tom を 12 歳の時むりやりダービーのグラマースクールに送った。しかし、繊細な神経を持ってはいたが、生まれながらの農民だった彼は、どうしても学業にはなじめなかった。いくら努力しても知的な分析力と集中力が身に付かず、農場に帰って来るのを喜んだ。農場での労働は彼に存在感を与え、心を落ち着かせた。土に生きる農民の血が彼の本質を形成していたのである。彼の心にも未知なる世界に対する激しい憧憬の念はあったので、その世界に入ろうとしたが、非常な努力を強いられた結果、挫折してしまった。

更に、19 歳の時娼婦との経験の失敗でも深い幻滅と性的不安を抱いた。彼は他の農夫たち同様に、母をはじめとして女性を自分の拠り所として崇拜し、the symbol for that further life which comprised religion and love and morality (*ibid.*) と見なしていた。性の欲望に悩まされながら、神聖視する女性を欲望解消の道具とすることに耐えられず、且つ自分の真に求める女性を見つけられずに苦しむのであった。農場内に閉じ籠もっている現実生活に満足できず、外の世界に対して憧れを持ち、自分を解放する手掛かりを掴もうともがいていた。閉塞感に満ちた現状から脱出して、未知の世界に解放されなければ自らの真の生はないと思っていた。学問の場で、精神世界において未知の世界へ入ることができず、性という肉体を通じても到達できなかった。精神的に

も肉体的にも挫折感と幻滅感を抱いてしまった彼は長い間、自分は2度とそこに入ることができないのではないかと怖れ、悩む。だが、性的幻滅感は偶然ある女性との行きずりの、一夜の性体験で癒される。その体験が彼に深い満足感を与えた。またその女性の情夫である洗練された物腰の外国人に精神的な意味での未知の世界の具体例を見せられて、感動し、それが自分でも手に入れられる世界であることを知った。だが、どのようにして自分のような生活をしている男がそれを得られるのか悩むことになった。

28歳の時、Lydia Lenskyに出会った瞬間、‘That’s her.’ (*ibid.*)と無意識に叫ぶ。Lydiaはポーランド生まれの女性で、祖国解放の動乱の際、軍医で愛国運動に狂奔した夫と共に英国に亡命して、夫の死後、娘Annaと2人で暮している。彼女は1度絶対なるものと信じたものが、崩壊するのを経験した女性である。Lydia, as if drugged, followed him like a shadow, serving, echoing. (Chap. II)と描かれているように、革命思想に夢中になり、顧みることの少なかった子供が死んだ時、夫と革命思想という絶対なるものに対する信頼が壊れ始めた。夫が革命運動に失敗し、イギリスへ亡命し、失意のうちに死ぬという姿を見ているので、彼女の心の中で絶対なるものは完全に崩壊してしまっていた。LydiaはTomにとって完全に未知の世界であった。Tomは彼女に会って、今まで空虚であった自分が新しくリアルなものに生まれ変わったように感じた。そして異国人としての彼女の背後にある未知なものに不安を抱きつつも、自分の理解し得ないものを持つ存在として彼女を求め、求婚する。彼女も革命家であった夫のもとで理想を求めての戦いに疲れ、安定を願って彼との結婚を承諾する。Tomは未知の世界であるLydiaを農場に迎え入れることによって、外部に未知の世界を求める必要がなくなったので、社会における自分の位置について無関心でいられるようになった。またLydiaも革命思想に夢破れた経験から社会に背を向けていた。その結果、2人は社会から切り離された生活をするようになった。

作者がLydiaという異国人を導入したのは、異なった人種の血が混じるということのほかに、異なった過去を持つ2人が結ばれ、互いに未知なるものを探求し、過去から新しい世界へ生まれ変わることを意図している。しかし、この異質性・乖離感 (*foreignness*, Chap. I)を内包した2人にとって、現実の結婚生活は必ずしも順調とは言えなかった。肉体的な満足は得られたが、精神的には常に不安や不調和に悩まされた。Tomは絶えずLydiaの背後に張り付いている未知の世界に対する不安を抱き、彼女は暗い過去から甦ろうとする意欲と、それを引き戻す暗い虚無感の間を行きつ戻りつしていたのである。Tomによって自分が甦りつつあることを感じて閉ざしていた殻を開くと、彼は不安のためすぐに応じることができない。するとLydiaは再び自己の殻を閉ざしてよそよそしい態度に戻ってしまう。これに焦れて、彼は掴みかかって自分を認めさせたい衝動に駆られる。肉体的合一の歓喜と耐え切れぬ精神の乖離感が反覆する波のように2人を襲うのであった。

英語をうまく話せないLydiaと生来無口なTomの間には、会話が殆ど成り立つことがない。そ

れ故、会話で相手を知ることは難しく、彼は彼女を観察し分析し、その思考、心理、性格を推測しようとする。だが、それは余り成功しなかった。やがて彼の心に彼女に対する怒りと憎しみが生じて行く。超然とした様子の Lydia は彼など全く関心のない冷たい女、利己主義で人間らしい優しさや思いやりのない女と、彼の目には映る。彼は怒りと憎しみを抱きながらも、何時かは、彼女が自分を喜びで満たしてくれるようになると期待して、苦しみながらも、彼女から離れられずにいる。

結婚2年後には、Lydia は Tom との子供を設けることによって、全く安定した暮らしを確保し、子供の誕生とともに一層自己充足的になってしまった。彼はそんな彼女に耐え難い不満を抑えられない。自分の腕のなかに彼女をしっかりと抱き締めながらも、彼女の実態を把握できない。酒にふけり、連れ子 Anna に愛情の充足を求めるようになっていた。彼女に対する不満が高じている時、彼は兄の情婦と会い、この女性の中に未知の世界を見て、ただ妻にだけしがみついていないで、自分も情婦を持ちたいと思う。彼の心を察知した Lydia は意外な言葉を吐く。

“You come to me as if it was for nothing, as if I was nothing there. When Paul came to me, I *was* something to him - a woman, I was. To you I am nothing - it is like cattle - or nothing.”(Chap. III)

Lydia は過去に夫と子供を失った経験があり、新しい世界も失うのではないかという不安のため、超然とした態度をとらざるをえなかった。Tom が浮気を考えていると分った今、もはや超然とはしていられなくなる。彼は彼女が自分に望んでいることは、崇められたり敬まわれたりすることではなく、一個の女として扱ってくれることなのだを知る。Tom は、Lydia の真の気持が分かり、この危機に際し、互いの気持ちが触れ合った時、2人は肉体的にも接近し、その関係に完全なる充足を得られた。その結び付きに満足して、新しい世界を発見したと感じ、以後互いの過去を気にしなくなり、調和ある完全に対等な男と女として結ばれたということにされている。

Blind and destroyed, he pressed forward, nearer, nearer, to receive the consummation of himself, be received within the darkness which should swallow him and yield him up to himself. If he could come really within the blazing kernel of darkness, if really he could be destroyed, burnt away till he lit with her in one consummation, that were supreme, supreme.

There coming together now, after two years of married life, was much more wonderful to them than it had been before. It was the entry into another circle of existence, it was the baptism to another life, it was the complete confirmation. (*ibid.*)

ロレンスは夫婦関係において、観察や分析などという精神の働きなどは全く無効であり、夫婦の真の結び付きは完全な肉体的結び付きであるという考えを示しているようだ。Tom と Lydia は素晴らしい世界を体験できた。2人は互いをその門として新しい世界に入ったが、それ以上その奥へ探検して行くことはなかった。ずっと不調和に悩んでいた2人がどうして急にこのような完全な充足に達しえたのか、その経緯は唐突かつ不自然で、説得性を欠いている。精神面の不調和がそう簡単に解決されえたとは考えられない。肉体的満足に没入することによって、その不調和を意識から取り除こうとしたと解釈するほかはない。ここでは、相手に自己の意志を押し付けて服従させようとする自我の闘いは見られない。第1代において未知なる世界の探求は初歩的で無意識的の段階に留まったまま終了している。2人の関係についてロレンスが示したのはここまでである。

舞台は次の世代の結婚に移る。Anna は亡命した家庭で貧困のうちに育ち、不安定な生活をしてきた。母の再婚によって、穏やかな性格の、新しい父 Tom が彼女に深い愛情を注いでくれた。だが、この愛情ととも、Tom が妻 Lydia と十全たる夫婦関係が築けずに、その代償として始まったものである。人生で最も多感な時期をこのような境遇で過ごした少女が、いかに精神的な安定を求めているようにも、揺るぎない自信を得ることは困難であろう。彼女は美しく、気位は高いが、落ち着きなく傷つき易い少女に育ち、不安定な自意識に悩まされていた。

Anna が成長した頃、Brangwen 家は経済的にも豊かで、その土地では尊敬されるようになっていた。彼らは農場という外部から遮断された環境の中で世間の評判などを気にしない、孤立した世界を作っていた。彼女は自分を社会との関係の中で考える必要はなかった。社会では思いのままに振舞い、都合が悪くなると、農場に逃げ込めばよかったのである。だが、学校への失望、社会への不適合、家庭の空気に対する反感などから現実生活を厭い、自由な世界にあこがれる。両親に頼り切っていた半面、外の世界へ出て行きたい気持ちを強く持っていた。

Anna が 18 歳の時、従兄の William が訪ねて来る。溢れんばかりの活気に満ちた青年であった。彼女はたちまち彼に惹かれ、

In him, she had escaped. In him the bounds of her experience were transgressed: he was the hole in the wall, beyond which the sunshine blazed on an outside world. (Chap. IV)

と感じた。この結び付きは彼らを新しい世界へ甦らせる運命的なものとなる。20歳の Will と 18歳の Anna の若い2人は愛の歓喜に酔い、恍惚となって、間もなく周囲の心配をよそに結婚を決めたのであった。皆の温かい祝福と牧歌的な雰囲気の中に式を挙げ、新婚生活に入る。彼らは新しい世界に生まれ変わったような幸福な気持ちになった。

Will と Anna の間にはこうした幸福な気持ちにもかかわらず、早くも激しい自我の葛藤が始まる。

この葛藤は先代とは違って、個性の違いから来る対立であり、若さも手伝ってか、互いに譲らず、自我を主張して相手を征服しようとするものであった。先代とは比べものにならぬ激しさと執拗に闘われる。争いは Anna が新婚の夢から覚めて外の世界へ眼を向け始め、ティー・パーティを開こうとするのに対する Will の嫉妬から始まる。彼は無視されたと感じ、心は怒りにかたたく閉ざされる。彼女は自分にまつわりつく彼の暗い意志を恐れ憎む。

情熱と歓びだけの時間は持続しない。歓びにみちた関係は互いに精神的、肉体的な創造力を持ち、肉と霊とのバランスを保たなくてはなし得ないものである。そのような均衡なくしては男と女とを結び付ける力は急速に消滅してしまう。Lydia は「女」として「母」としての存在を主張したが、Tom は土地に根を下ろし、土に生きる農民としての自信と血の中に脈打つ自然のリズムをもって、妻に十分に拮抗できた。Will と Anna は強く愛し合って結ばれるが、先代に比べて精神的安定性に劣る。2人が結婚すると、相手を侵すことなく、独立した個人としての領域を守りながら調和と均衡を保つことが難しくなる。すると、相手の領域に侵入し、服従させることによって、自分に不足しているものを補おうとすることになる。2人の間には結婚後、間もなく家庭内における主導権を巡って激しい争いが始まる。創造の源泉である大地から切り離された Will と比べると、出産と育児という人類原初からの創造活動を守り続けて来た、「女」である Anna により多くの活力があるのは明らかである。彼は女の持てるあらゆる魅力を発揮し、豊饒な肉体をもって迫って来る彼女に何をもって応えようとするのか。彼はレースの図案工である。木彫り作業の中や、教会建築の中に創造的精神を發展させ、心を満たすものを求めている。教会の建築の中に壮大な霊的世界の具象化を見て興奮し、その高貴な精神に強く惹き付けられる。Anna にはこのような Will の霊的な世界への渴仰などは理解できない。彼女は女としての論理をもって、彼の世界を粉碎してしまう。人間の生命の根源に根ざした女性の創造力を背景に、彼の観念的な精神性など彼女にとっては取るに足らぬものであった。

Anna は結婚してマーシュ農場から脱出し、Will との新しい生活という未知の世界に入って、「生の真実」に浸れる期待 (Chap.VI) を抱いたが、実際の結婚生活では、夫と価値観が合わず、それも叶わない。その価値観の相違は宗教に対する態度に顕著に現れ、2人の人間性をも明らかにしている。

Will は「絶対者」としてのキリスト教の神を信じている。その信仰は日常生活とは全く隔絶したもので、教会にいる時に、彼は自分の罪も隣人の罪も、全然気にならなかった。彼にとって神とは宇宙とそこにある全てのものを創り出し、統べ治めるものではなかった。神は、教会の中にのみ存在し、その中にあるさまざまなシンボルや宗教絵画で示されるものでしかなかったし、*The verity was his connexion with Anna and his connexion with the Church, his real being lay in his dark emotional experience of the Infinite, of the Absolute. (ibid.)* 彼は精神と肉体とを分離させ、精神的には、教会という閉ざされた世界で神との情緒的な結び付き満足感を求めた。この

ような彼の神との精神的交流は Anna との肉体的交わりとほぼ同質のものである。彼女との間では、彼はただ肉体的快楽を追い求めているだけである。神との精神的交流も、彼女との肉体的結び付きも、自我とは全く無関係なのである。

Willにとって、家庭における日中の生活とは夜の、Anna との肉体的交わりの延長線上にあるものにすぎない。一方、彼女は肉体の交わりと、日常生活を切り分けることのできない夫には我慢がならない。Will は自我の独立が確立していないので、その情欲が常に彼女に依存し、まつわり付き、彼女を圧迫するよう感じられる。

彼は日曜日には、独り、神との霊的な交わりに恍惚としている。自我と靈魂を結び付けて考えることのない彼が神とただ霊的にだけ交わることに、彼女はひどく腹を立てる。彼女は彼をこのような恍惚状態から引きずり降ろすために、また日頃の絶え間ない圧迫感を排除するために、夫の信仰を徹底的に攻撃する。芸術家肌の彼は教会の建物に不思議な魅力を感じて夢中になっているが、彼女はそのことも気に入らない。彼は教会の建築に関心を持ち、宗教に絶対的・神秘的な意味を求めようとするが、彼女は教会に神秘的なものを求める彼の態度を嫌い、反撥する。このように2人が対立する時、Will は Anna にとって見知らぬ人、彼女から遠く離れた存在に思えて来る。

He was very strange to her, and, in this church spirit, in conceiving himself as a soul, he seemed to escape and run free of her. In a way, she envied it in him, this dark freedom and jubilation of the soul, some strange entity in him. It fascinated her. Again she hated it. And again, she despised him, wanted to destroy it in him. (*ibid.*)

Anna は Will が秘かに楽しんでいる魂の自由と歓喜を壊したくなる。彼女は彼が自分を圧迫することには我慢できないが、彼の執着心の対象が彼女に向かっていないと分かると、それが教会であつても、彼を許せない。彼の精神を支配したいのである。彼は自分の情欲の道具でしかなかった彼女に自分の信仰が馬鹿にされ、しかも自分の精神まで支配されることに激しく反撃する。彼らの間に互いに支配権を握ろうとして、熾烈な闘いが始まる。

精神世界の支配権を巡る2人の闘争はリンカーン大聖堂でのエピソードに最もよく示されている。結婚をして最初の年、2人はこの大聖堂を訪れ、中に入る。彼は大変感動興奮し、伽藍の中で恍惚となる。

His soul leapt, soared up into the great church. His body stood still, absorbed by the height. His soul leapt up into the gloom, into possession, it reeled, it swooned with a great escape, it quivered in the womb, in the hush and the gloom of fecundity, like seed of

procreation in ecstasy.(Chap.VII)

今その中で安心感に浸っている大聖堂は Will にとって “the womb” であった。子宮とは人誰もが生成された場所である。外敵からのすべての脅威を排除し、身を確実に守ってくれた所で、本能的に感得する安らぎの場である。子宮のような堂内で恍惚としている彼は、安息を求めて再び母の胎内へ帰ろうとする胎内回帰願望の少年のようであった。大聖堂内部に入ると更に強い感動に襲われる。

Here the stone leapt up from the plain of earth, leapt up in a manifold, clustered desire each time, up, away from the horizontal earth, through twilight and dusk and the whole range of desire, through the swerving, the declination, ah, to the ecstasy, the touch, to the meeting and the consummation, the meeting, the clasp, the close embrace, the neutrality, the perfect, swooning consummation, the timeless ecstasy. There his soul remained, at the apex of the arch, clinched in the timeless ecstasy, consummated.

And there was no time nor life nor death, but only this, this timeless consummation, where the thrust from earth met the thrust from earth and the arch was locked on the keystone of ecstasy. This was all, this was everything.(*ibid.*)

Will はここに、理想的な結婚の象徴的表現を見た。数多くの石柱が左右対称に、両側から天に向かって高く伸び、中空の真ん中で結び合い、力の均衡を保って支え合っている。薄暗がりの中を突き抜けて聳える石の柱が、生命に深く根ざした精神的向上の願望をアーチの上で固く結ぶ所に、自己の魂を安住させること、それが彼が求めて来たものであった。彼はこの光景に深い感動を覚え、その世界に思いを馳せる。

だが、こうした Will の精神的昂揚感・充足感も長くは続かない。それを見た Anna は落ち着かなくなり、自分の支配の届かない所に夫がいるような気がする。夫は彼女が入りこめない世界で独り恍惚として自己充足している。彼女は自分の存在が無視されていると思い、それは自我意識の強い彼女にとっては怒りが治まることのない屈辱であった。大聖堂と夫の陶酔的交歓を破壊したくなる。堂内の石彫の顔の1つひとつに故意に意地悪な嘲笑と批判をあびせることで、彼の忘我の気持を白けさせる。彼女は精神的・神秘的の世界よりも具体的な創造や肉体的に把握し、認識し得る悦びに強く心惹かれていたので、彼女の領域から離れ、彼女の完全に理解しえぬ象徴的世界に飛翔しようとする夫の意図を挫いてしまい、早々に現世的次元に引き戻してしまった。このような対立する2人の熾烈な自我の闘争も、やがて大きな変化を迎える時が来た。

Anna は妊娠していることを知った時、歓喜の余り裸になって踊る。自己充足的、本能的母性の

中で、彼女が恐れるものは何もなくなった。勝利者である彼女には男は、最早必要ではない。

…again she took off her things and danced, lifting her knees and her hands in a slow, rhythmic exulting. He was in the house, so her pride was fiercer. She would dance his nullification, she would dance to her unseen Lord. She was exalted over him, before the Lord. (Chap.VI)

自分に子供を与えてくれた the unseen Creator、即ち her unseen Lord に対して、そして Will が信じる神に自分が勝ったことに対して、歓喜に溢れて踊るのである。彼女の肉体の魅力に弱かった彼は、自己の体内に新しい生命を宿すことができるという、女性の絶対性に対し徐々に闘いの敗者となって行き、異常な自己主張を止める。彼らの家庭は均衡と調和という状態から離れ、妊娠と同時に自己充足した彼女の勝利となる。Will は彼女が求める physical love のみに満足するようになる。生まれた子供を胸に抱いた Anna は「勝利者アナ」(Anna Victrix, *ibid.*) と誇らしげに叫び、母の歓びに輝きながら育児に没頭する。女性上位の立場を得た彼女は安定し、最早夫の世界に干渉することはなくなった。

このように、Anna の絶対的勝利の上に、2人はロレンスが探求する男性と女性の愛の融合の問題を解決しないまま、物語の後景に退いて行き、この問題は次世代の Ursula に引き継がれる。

Anna と Will の場合は男が女に屈服し、外面的には一応の安定した関係が維持されるようになったが、当然完全な夫婦関係が打ち立てられたことを意味するものではない。その不調和の現れとして、Will と長女 Ursula との間に「奇妙な結び付き」が生まれた。先代同様、夫は妻で充たされぬものの充足を娘に求め、娘は父の不満や歓びに敏感になる。2人の結び付きは大変強くなるが、Will は Ursula が成長するにつれて自我に目覚め、親から独立して行こうとするのに苛立つ。娘を背負って高い位置から水路の水に飛び込むなどの、異常な加虐的振る舞いをしたりする。娘への異常な執着は、結婚において精神面での不調和を未解決にしたまま、肉欲の充足のみを追求するしかない Will の精神的欲求不満の代償行為である。そのような父の歪んだ愛情を受けて、Ursula は、多くの子供を産み育てることのみ喜びを感じて、卑俗な生活に満足している母に反発し、教会建築や宗教美術を愛し、教会活動に勤しむ父に対する尊敬の心を増し、強い精神的な絆を結んで行く。宗教的世界で精神的に高尚な生活をしたと思う一方で、自分の真実の姿を発見したいという願いが強くなり、その願いが彼女を現実社会の中へ入って行かせる。

Ursula が初めて Anton Skrebensky 青年に会ったのは、16歳になろうとしていた時であった。彼は21歳で、陸軍工兵隊に勤務していた。一種の宿命感を身にまとい、変化とか疑問といったものは全て超越して、自分自身の存在をそのまま受け入れてもらえばよいという態度であった。当時、宗教的生活と現実の生活の狭間で精神的に不安定な状況にあった彼女にとってこうし

た彼の様子は強い魅力を持っており、彼女はこのように自信に溢れて、毅然とした彼の態度を尊敬した。だが、彼の方はただ彼女の肉体に牽かれていただけだった。

ここで注目すべきは事の始まりが、Skrebensky とってはただ肉欲的な欲望から発していたということである。Ursula は自分自身の生き方を求め、求めあぐねて動揺する自我を安定させ確立させるために彼を求めていた。自己のアイデンティティの確立を助けてくれる伴侶として彼に恋した。それ故、彼等の関係を持続するためには、彼は彼女に対して男としての確固不動たる自我を守り抜いて、彼女の自立を助けねばならないのである。

2人は相手が自分に何を求めているかを露程も知らず、前の2世代の場合同様、たちまち互いに惹かれ、自らの情熱に身を任せる。揃って教会へ行ったり、納屋の中で抱き合ったり、祖父母や父母と同じことが繰り返される。彼らの見た教会は最早前の世代が見た神秘的なものではなく、修理工事中で混乱を極めており、現実世界の混沌と、宗教の無力さを象徴しているようであった。

2人にはWillのように教会の神秘に虹の調和を求め、宗教に救いを求めることは最早不可能で、共に力を合わせ、教会を乗り越えて現実を生きて行かなければならない。だが、Ursulaにとって不幸だったことは一見独立不動に見えたSkrebenskyの外観が全く見せかけであり、それが人生に対する深い洞察から生まれたものではなく、ただ単に人生に対する無知から生じていたことである。そのため、生き方の異なる2人はすぐ衝突することになる。Ursulaの叔父Fred Brangwenの結婚式でのことである。2人は夜の祝宴までの間、水路沿いに散歩する。Ursulaが“Do you like to be a soldier?” (Chap. XI) と尋ねたことから、2人の間に戦争という問題を巡って論争が始まる。国家や社会があって始めて、個人の存在が可能とする彼は自分は国家の一員だから国家のために義務を果たさなければならないと、軍人としての常識論を言うが、一切のものの基盤に個人が存在すると考える彼女は個人以外に国家の存在を認めず、従って戦争の意義を認めない。このようなやりとりのうちに次第に互いの考えの違いが明らかとなり、最後は次のような彼女の言葉で終わる。

“It seems to me,” she answered, “as if you weren’t anybody – as if there weren’t anybody there, where you are. Are you anybody, really? You seem like nothing to me.” (*ibid.*)

この対立は単なる個人的レベルの見解の相違ではなく、戦争という重要な社会問題に対する現代人としての認識の違いであり、同時に現代人の生き方についての根本的な問題である。前の2世代における対立とは大きく異なっている。

2人の対立は結婚祝賀の野外ダンス・パーティのシーンでクライマックスを迎える。Ursulaは月明かりの中で、この現実生活を超えて、未知なる世界へ飛んで行きたいという狂気にも似た衝

動に駆られる。彼女の魂は月光のもとで、Skrebensky に抱かれて踊りながら、既に月の世界へ飛んでいる。a quivering anemone (*ibid.*) のように身体を開いて月光を受け入れ、communion with the moon と consummation に陶酔しようとする。彼はそうした彼女を抑えて、自分に従わせようと接吻する。だが、かえって月光が闇を破るように、彼女を妨げる彼を引き裂いて無にしてしまう意思を持った、彼女の接吻が反撃に転じる。

She took him in the kiss, hard her kiss seized upon him, hard and fierce and burning corrosive as the moonlight. She seemed to be destroying him. He was reeling, summoning all his strength to keep his kiss upon her, to keep himself in the kiss.

But hard and fierce she had fastened upon him, cold as the moon and burning as a fierce salt. Till gradually his warm, soft iron yielded, yielded, and she was there fierce, corrosive, seething with his destruction, seething like some cruel, corrosive salt around the last substance of his being, destroying him, destroying him in the kiss. And her soul crystallized with triumph, and his soul was dissolved with agony and annihilation. So she held him there, the victim, consumed, annihilated. She had triumphed: he was not any more. (*ibid.*)

自我を持った男としての core (*ibid.*) を焼き尽くされて、彼はここに完全に破れてしまった。これはロレンスの抒情性と官能性をもって描き出される象徴的シーンで2人の肉体的不調和ではなく、精神的対立を明確にしている。本作品で月光のシーンは象徴的に用いられ、特に Ursula の場合その結び付きは密接である。月は彼女にとって、この現実世界を遙かに超えた未知の理想の世界を象徴している。Skrebensky は現実社会を肯定する常識人であるのに対して、彼女は本能的にその醜悪さを感じて否定する、未知の世界の探求者である。2人の対立は単なる性格の違いではなく、両者の生きる世界の違いを示す根本的対立となっている。

2人は互いに抱擁し合うが、彼等の上にはそれぞれの自己主張を喚起する月の光が降り注いでいる。Ursula は女性としての自己を失うことはない。男性としての Skrebensky の主体性とのバランスの上に彼女の愛を完成させようとしている。だが、彼は確固たる自我がなく、ただ世俗的な観念と因習的な規範に従って他律的に生きている。Ursula が求めて止まない未知の世界を切り拓いていく創造性には全く欠けている。当初から彼女に抱いていた肉体的欲望を捨て切れずに彼女と結ばれているに過ぎない。精神的に彼女に与え得るものを何も持っていない。空虚な自我を補完するものを彼女に求め、彼女に依存するしかない。月光を浴びながら自我の死闘に敗れた彼が相手では、2人の愛は均衡を欠いた不完全なものとしかなり得ない。このように、彼は Ursula が求める虹探求の道連れとして完全に失格してしまうが、これで2人の交渉が終わったわけではない。

この頃ボーア戦争が始まる。Skrebensky は軍務のために彼女のもとを立ち去って行く。Ursula は彼が南アフリカへ向かうと聞いて、あたかも the poles of the universe were cracking, and the whole might go tumbling into the bottomless pit (*ibid.*) かのような恐怖を感じる。戦争は the good of the greatest number のみが問題であって、個人は just a brick in the whole great social fabric, the nation, the modern humanity (*ibid.*) に過ぎない。戦争では真の個性は死んでしまう。戦争は個人の幸福ではなく、ただ物質的繁栄をもたらすだけである。彼はこのような現実に深い疑問を持たず、全体の幸福のために、軍人としての義務を尽くせばよいとのみ考えている。彼女は自分の考えと彼の旧弊な生き方の違いに暗澹とした気持を抱き、冷え冷えとした虚しさを感じつつ、戦地へ出発する彼を見送る。彼の方は彼女から離れることにむしろ安堵を感じている。既にここに2人の心は大きな乖離を生じている。2人の関係は戦争によって6年余り中断する。

Ursula は独立した生活を志し、「男の世界」(The Man's World) で自分の理想の教育を実践に移す意気込みをもって、社会に出て行く。父の紹介で小学校の助教師の職に就く。だが、その学校は薄汚く騒がしい子供たちを大教室に詰め込んで、現実社会のメカニズムの型にはめ込もうとする教員の意志と、その締め付けに反抗して、隙さえあれば逃げ出そうとする生徒たちの思惑がせめぎ合う闘争の場であった。そこには人間的な共感もなく、学校は彼女が嫌悪している機械文明の一部となっていた。彼女が立ち向かう相手は個人としての子供ではなく、非人間的な集団であった。この権力関係はまた教員たちと校長の Mr Harby との関係でもあった。そこでなされていることは、校長が望んでいた社会機構という機械の部品となるべき生徒達に必要な秩序と訓練を与えることで、彼等の人間的成長や発展などを促そうとするものではなかった。教員はその訓練のために必要な道具であり、校長の方針に疑問を持ったり、その目的を効率的に遂行できない人物は軽蔑と憎悪の対象となった。教師の勤めは生徒を単なる物として扱うことでしかなかった。生徒は人間扱いされず、教師は教える機械になることを要求されていた。彼女が2年間の教師生活で知った「男の世界」はこのように非人間的な索漠としたものであった。

正式な教員免許を取るために、Ursula は小学校の教員を辞め、大学に進む。最初の1年は立派な建物を持つ、静かな学問環境に恵まれた大学に感激しながらも、慣れぬ環境に落ち着かない気分で、現実感のない感じを抱いて講義に聞き入る。だが、1年とたたぬうちに最初の感激は薄れる。冷静な目で見れば、教授たちは実際には人生と知識の神秘に精通しているわけではなく、殆ど無用な知識の断片を切り売りしているに過ぎない。大学は彼女の知的欲求に応えてくれる知の殿堂ではなかった。彼女は授業に対して急速に興味を失って行った。

そのような状況でも、生物学は Ursula の興味を引き立ててくれる数少ない学科の1つであった。顕微鏡の下で動く単細胞の微生物は不思議な生命力と意志とを持っているかのようであった。彼女が常に心を牽かれていたことは生命とそこにある生きようとする意志であったが、物理学の Dr. Frankstone は彼女に次のように問いかける。

“May it not be that life consists in a complexity of physical and chemical activities, of the same order as the activities we already know in science?” (Chap. XV)

この見解は霊と肉とに強い関心を抱き、生命の神秘を思い、それについて深い認識を得ようと努めて来た Ursula にとって全く容認できるものではなかった。彼女は生命や魂に深く考えを巡らし、生命の目的は各々がそれ自身になりきり、その存在を確立すること、a consummation, a being infinite (*ibid.*) になること、未知なる世界を探り当て、宇宙に満ちている根源的な生の充足を得ることであるという考えに到達した。人間が機械の一部にならざるを得ないような現代に、ロレンスが生命の神秘と尊厳を強く主張し続けたことは高い評価を与えられるべきであろう。

Skrebensky が不在中、Ursula は専制的な校長 Mr Harby、知識の小売人にしか過ぎない大学の教授、生命の意義などは認めようとしないう学者 Dr. Frankstone 等との交流で、精神的にますます不安定になっていた。そんな頃、彼が6年の歳月を経て再び彼女の前に姿を現す。彼女は自らの主体性を確立するため、彼は心の空虚さを満たし、自己の支えを手に入れるため、彼らは再度結ばれて、激しい愛欲生活を再開する。その関係は以前以上に官能的に燃え上がるが、2人の間には今までの立場から、本質的な進歩は見られなかった。彼は内面的な思考などは必要とせず、外部からの規範と統制によってのみ活動する軍隊という組織の中にいたのでそれが著しかった。婚約にまで到りながらも、2人の関係は失敗する。多くの経験をして、思考が深まり、人間的に彼の枠内から大きくはみ出してしまった Ursula は結婚に踏み切ることができなかった。未知なる世界を求めて止まない彼女は、旧弊牢固で、現状肯定的な彼とは既に相容れない人格となっていた。しかし、彼女の精神面になど考えが及ばずに、ただ彼女の肉体のみを求める彼は、深く肉体的に結ばれているのに、何故結婚が拒否されるのか分からなかった。この拒絶に際しての激しい精神的錯乱は彼が内面的に脆弱な人間であることを示している。

Ursula に捨てられ、錯乱状態に陥った Skrebensky は、彼女の拒絶後、最も容易に結婚できると思われた女性に接近し、すぐに結婚してしまう。最後まで彼にとっての結婚は主体性を持った愛の完成を目指すものでなく、ただ外面的に取り繕われたもの、自分の欲求を満たすだけのものであった。この婚約の破棄により彼女に最後の試練が襲う。それは彼と最終的に別れ、彼が立ち去ってしまった直後のことであった。妊娠していることが分かるのである。当然彼女は激しく精神的に動揺する。動揺と混乱の中、自分自身にもはっきりと確信できていない「霊」的な欲求や女性としての主体性の希求などのために彼を捨て、本来女性にとって最も創造的な活動である出産と育児という機会を失ってしまったことを深く後悔する。この時、女性の自我を、男性の自我と均衡させた上に固い愛の結び付きを成就しようという現代的女性としての希望を捨てる。今まで反撥を抱いていた、家庭を守り、出産し、子供を育てることに満足する伝統的な女の立場にま

で後退しようとする。彼に対する今までの行為の許しを乞い、結婚を求めて手紙を書く。その後、10月のある午後、何か身の内に狂おしく騒ぐものを感じ、家の中には窒息してしまうような気分になり、ウィリーグリーンに散歩に出る。野辺には静かに再生を促す雨が降り注いでいる。濡れながら森の方に向かって、荒野を歩いて行く。突然そこで、馬の大群に行く手を遮られる。彼女は胸苦しさに耐えながら歩き続ける。彼女が馬に近付くと馬はぱっと飛び散る。馬の動きが彼女の身を突き抜けて行く。馬は再び彼女を追いかけて来る。

Suddenly she hesitated as if seized by lightning. She seemed to fall, yet found herself faltering forward with small steps. The thunder of horses galloping down the path behind her shook her, the weight came down upon her, down, to the moment of extinction. She could not look round, so the horses thundered upon her.

Cruelly, they swerved and crashed by her on her left hand. She saw the fierce flanks crinkled and as yet inadequate, the great hoofs flashing bright as yet only brandished about her, and one by one the horses crashed by, intent, working themselves up. (Chap. XVI)

最後に、辛うじて生け垣の陰に逃れて助かる。命からがら、身体の芯まで濡れながらも、やっと家に辿り着くと、そのまま2週間苦痛に悶えながら床に就く。

この馬の場面は多くの象徴的シーンが描かれる *The Rainbow* の中でも最も優れたものの1つである。彼女を追って荒れ狂い跳び回る一群の馬の姿は外見的にはあくまで情景描写の1つのシーンだが、一方では Ursula の内面、胸の鼓動ともとれるリズムをもって、彼女の精神の激しい動きを活写している。彼女はここで、その馬に象徴される、より大きく常に活力溢れる生命を自らの瞬間の生命に吸収し、誕生と死の間に奏でられる大きな生命のリズムと一体になり、「時間の壁」を超越したのである。Ursula は Skrebensky との愛に傷付き、一度は自分自身の信念を捨て、生きる意欲さえ失いかけていた。荒野で馬の群れと遭遇したことによって、蘇生し、体内に再び生命力と大自然のリズムとを取り戻す。過去の不毛な生活を乗り越え、自分自身の理想の生き方を求める意欲を回復する。彼が既に別の女性と結婚してしまったという知らせが着いても、殆ど彼女の気持ちに影響を与えなかった。その時、行く手に現われるのが天と地、霊と肉体とを結ぶかに見える虹の姿であった。

小説 *The Rainbow* の終末は、ロレンスがヒロインの Ursula を現代という困難な時代の中で、虹に示されるような真に対等な男女関係、強固な愛で支えられる創造的な結婚生活の確立を目指して、更に強い意志を持って前進し続ける女性として示しているのである。

注

- 1) *The Letters of D. H. Lawrence*, p.198

参考文献

- 1) Lawrence, D. H., *The Rainbow*, Cambridge Univ. Press, 1989
- 2) Huxley, Aldous, ed. *The Letters of D. H. Lawrence*, William Heinemann Ltd., 1932
- 3) Daleski, H. M., *The Forked Flame*, Faber and Faber, 1965